

森本 壮亮 (桃山学院大学)

マルクスの資本循環論と転化論 —F.モウズリのマクロマネタリー理論によせて

(この報告希望は、本記念シンポの CFP を松本朗委員経由でえた Fred Moseley 教授からの報告希望の提案を受けた伊藤誠氏を中心として、佐々木隆治、斎藤幸平、吉村信之の諸氏とも調整し、**A Dialog on Marx's Value Theory and the Transformation Problem** というタイトルの分科会を一、二企画したいと相談をすすめた経緯にもとづいています。)

『資本論』第 1 巻における価値から第 3 巻における生産価格への転化の論理 (転化論) については、『資本論』第 3 巻が出版される以前から現在まで、数多くの論争がおこなわれてきている。しかし、この「転形問題論争」として知られる論争の過程で 1970 年代までに明らかにされたことは、生産価格を導くのに『資本論』第 1 巻レベルの価値論、すなわち労働価値説は不要であること、そして「総計一致二命題」の同時不成立に代表されるように、労働価値説は致命的な欠陥を抱えているということであった。またそれに付随して、第 1 巻からの価値論が、そのままの形では現実経済に適用できないかのような印象も広まった。

このような状況に対して、1980 年代以降、それまでの通説的な価値論解釈を問い直し、『資本論』第 1 巻からのマルクスの価値論を、現実経済に直接的に適用可能なものとする新たな解釈が幾種類か出現している。その中でも最も有名なものが、総付加価値と社会的総 (直接) 労働との比率である「貨幣の価値」(もしくは「労働時間の貨幣表現」と呼ばれる概念を用いる **New Interpretation** であるが、近年は、そこからさらに歩を進めて、資本循環論をベースとして、価格次元で価値論を解釈する「単一体系解釈 (**Single System Interpretation**)」も広がりを見せている。

この単一体系解釈には、不変資本部分を新技術における現在価値 (時価, 再調達価格) で評価すべきだとする F.モウズリの「マクロマネタリー理論 (**Macro-Monetary Interpretation**)」と、資本投下時点の価値 (取得原価) で評価すべきだとする「時間的単一体系解釈 (**Temporal Single System Interpretation**)」の 2 種類が主に存在するが、特に前者のモウズリが 2016 年にマクロマネタリー理論を包括的に提示する著書 (**Money and Totality: A macro-monetary interpretation of Marx's logic in Capital and the end of the "transformation problem"**) を出版し、話題となっている。

本報告は、モウズリのマクロマネタリー理論を以上のような流れに位置づけて積極的に評価するとともに、それへのコメントとして、(i)再生産表式ではなく資本循環論をベースとしてマルクスの価値論を解釈する点は賛成できること、(ii)ただし、「資本一般」を「総資本」として解釈し、『資本論』第一巻をマクロの議論だとする点については、議論の余地があること、(iii)また、生産過程に入る前貸資本 (不変資本および可変資本) を所与とする資本循環論と、不変資本部分を現在価値 (時価, 再調達価格) として新技術で評価すべきだとす

る点との整合性については、さらなる説明が必要であること、(iv)そして、この問題を考える場合に、生産価格とは何か？（ある時点における均衡価格なのか、長期均衡価格なのか？）という点を明らかにする必要があること、の4点について主に論じる。

また関連して、時間的単一体系解釈や、伊藤誠氏の三表式による転形問題解釈についても、論じる予定である。